

# 留学生と日本人学生の合同授業におけるディスカッションの試み —学生アンケート結果からの考察—

小木曾 左枝子  
大西 吉之

## The Implementation of Collaborative Learning between International Students and Japanese Students: An analysis of student questionnaires from a discussion class

Saeko OGISO  
Yoshiyuki ONISHI

### 要 約

本稿は、中級レベルのオランダ人留学生と日本人学生による合同授業の実践報告を目的とする。同性婚をテーマとしたテレビ番組のビデオを見た後、グループディスカッションで自由に話す形式で合同授業を試行し、そのディスカッション授業についての質問紙調査を行った。そのアンケート結果をもとに、参加学生のディスカッションに対する満足度、ディスカッションを通しての学びや発見、ディスカッション授業の評価できる点や問題点をまとめ、今後の課題について考える。

【キーワード】 合同授業, 留学生, 日本人学生, ディスカッション, アンケート

### 1 はじめに

富山大学国際機構（旧国際交流センター）では、2017年4月よりオランダのライデン大学から学生を受け入れ、3ヶ月間のライデン大学短期日本語研修プログラムを開講している。同プログラムは、国際機構で開講している中級クラスの日本語科目を受講し、他の留学生とともに日本語を学習するものだが、彼らが3ヶ月という短期の留学中に、富山大学の学生をはじめ、日本人との交流機会が持てるように、ライデン大学生専用の「異文化間コミュニケーション」授業を設けている。その授業活動の一つとして、我々は日本人学生との合同授業を組み込み、日本語でのディスカッション授業を試みている。そこで本稿では、客観的評価を踏まえた今後の授業改善のため、2018年度ライデン大学短期日本語研修プログラムに参加した留学生および経済学部専門ゼミナール所属の日本人学生に行った合同授業のディスカッションについて、授業後に実施したアンケートの結果をもとに、ディスカッションに対する満足度、ディスカッションを通しての学びや発見等、学生がディスカッションを評価した点や不満に感じた点について考察する。

### 2 合同授業の概要

合同授業は、2018年6月5日に経済学部専門ゼミナールに留学生が訪れ、授業を1コマ（90分）使う形で行った。参加者は留学生が13名（アンケートに回答した学生は12名で全員オランダ人）、日本人学生が10名だった。授業は、NHK ハートネット TVで放映された『僕たちが選んだ「結婚』』というオランダ人男性と日本人男性の結婚について描かれているテレビ番組のビデオを見た後、グループで自由にディスカッションを行う形式にした。このトピックを選んだ理由は、経済学部専門ゼミナールが同性カップルの権利保障をテーマとして研究作業の習得を授業のねらいとしていることもあり、

また留学生にとっても十分に背景知識があるトピックだと思われたからである。ビデオで使用されている言語は、英語やオランダ語で日本語字幕が表示される部分も一部あるが、ほとんどが日本語である。また、ディスカッションの使用言語は日本語とした。

国際機構で中級クラスの日本語授業を受講している留学生にとって、その場でビデオを1度見て、内容を理解し、すぐにディスカッションに入るのは、日本語の熟達度から難しいと考えられたので、合同授業の前に準備としてビデオを見るのに授業を1コマ(90分)使った。その際、まず留学生にとって未習だと思われる語や表現のリストを配布し、確認した。文脈があった上で確認したほうが良いと思われる語や表現については、ビデオを見ながら確認した。また、ビデオを見ながら、そしてビデオを見た後で、教師が作成した理解問題を使用し、ビデオのあらすじや重要な点を確認した。

一方、経済学部専門ゼミナールでも、事前にディスカッションの準備を行った。日本人学生は総じてゼミに所属するまで、こうしたテーマにはほとんど触れていなかった。そこでまず、英語文献の輪読を通じて、オランダでは同性愛者が社会でどのように受け入れられているのか理解を深めさせた。テキストには、オランダ政府系機関による社会調査報告書の概要(The Netherlands Institute for Social Research SCP, *Out in the Netherlands: A study into the acceptance of homosexuality in the Netherlands*, 2007)を選んだ。その後、日本の状況についても各種新聞記事を収集させ、情報共有に努めさせた上で、上記の番組を見せ、ディスカッションに備えた。ただし、ディスカッションそのものの訓練は、特に行わなかった。

### 3 アンケート結果と考察

アンケートの質問は、留学生と日本人学生の合同授業におけるディスカッションを、どのように行うのが両者にとっていいのか、どう改善していくべきなのか等を、今後検討していく際に学生からの声を反映できるようにすることを考えた。そして、8つの質問項目を設け、回答には選択回答式と自由記述式を併用した。質問文は日本語で準備し、留学生の日本語習熟度を考慮した文法や語・表現を使い作成した。また、記述式の回答については、留学生には、日本語で説明するのが難しい場合は英語で書いてもいいと指示を与えた<sup>1)</sup>。

アンケートは、留学生については参加者13人のうち12人(92%)、日本人学生については10人全員(100%)から回答が得られた。

#### 3.1 外国人とのディスカッション経験の有無について

学生にアンケートを実施する上で、まず留学生には日本人学生とのディスカッション経験の有無を、日本人学生には留学生とのディスカッション経験の有無を、以下の質問を用意し尋ねた。

##### 質問1

<留学生への質問>

今までに授業の活動として日本人学生とディスカッションをしたことがありますか。

「はい」と答えた人は、回数を書いてください。

<日本人学生への質問>

今までに授業の活動として留学生とディスカッションをしたことがありますか。

「はい」と答えた人は、回数を書いてください。

はい [      回]  いいえ (今回がはじめて)

結果は下記に表されているように、留学生も日本人学生も、外国人とのディスカッション経験がない学生が多かった。

	留学生 (12人)	日本人学生 (10人)
「はい」	3人 (25%)	1人 (10%)
「いいえ」	9人 (75%)	9人 (90%)

また、「はい」と回答した学生のディスカッション経験の回数については、ディスカッション経験があると答えた3人の留学生のうち、1人が1回、2人が2回だった。また、ディスカッション経験があると答えた日本人学生1人は、1回だった。よって、全体的に見ると、外国人とディスカッションをすることにあまり慣れていないオランダ人学生と日本人学生の間でディスカッションが行われたと言える。

### 3.2 ディスカッションに対する意識について

次に、授業の活動として、学生がディスカッションをどう考えているか知ることは、今後、ディスカッションを授業にどう組み込むか考える上で重要だと考え、以下を質問項目に入れた。

#### 質問2

一般的に授業の活動としてディスカッションが好きですか。

はい  いいえ  どちらとも言えない

[理由・コメント]

以下の表から分かるように、ディスカッションが好きな学生は、日本人学生より留学生のほうが若干多いが、傾向はほぼ同じという結果であった。

	留学生 (12人)	日本人学生 (10人)
「はい」	6人 (50%)	4人 (40%)
「いいえ」	2人 (17%)	2人 (20%)
「どちらとも言えない」	4人 (33%)	4人 (40%)

留学生については、これが一般的なオランダ人留学生の傾向なのかどうかは、アンケートを行った人数が少なく、また普段の日本語授業の様子からは、この年に受け入れたオランダ人留学生は、静かな学生が多いと複数の授業担当教員が述べていたことを考えると、判断が難しい。

理由やコメントについては、留学生は「はい」と答えた6人のうち2人が、日本人学生は「はい」と答えた4人全員が記入していた。日本人学生のディスカッションが好きな理由は、4人とも共通しており、「自分とは違う考えや意見などが聞けたり、自分が思いつかなかった考えが聞けたり、新しい発見があっておもしろいから」といった内容のものが多く、日本人学生にとってディスカッションは、他者の意見を聞く場であることがうかがえた。留学生で理由やコメントを書いた2人のうち1人は、「ディスカッションをするのは楽しい」とだけ述べていたが、もう1人の留学生のコメントからは、ディスカッションがどうあるべきかという考え方が見受けられた。そのコメントには「トピックについて深く考え、自分の意見を相手と分かち合い、相手の意見に対して自分の考えを述べることに前向きな姿勢があるディスカッション・パートナーを見つけることがとても重要だ。そういう場合は、ディスカッションがとても楽しい活動に思える」と書かれており、ディスカッションは他者の意見を聞く場である以上に、相手の意見に対して自分の考えを述べ、議論を交わす場であるべきだという考え方が垣間見られた。1人の留学生からのコメントではあるが、留学生と日本人学生の間に見受けられるディスカッ

ションに対する意識の違いが、後述のディスカッションの満足度やトピックに関する知識の深まりへの回答に影響しているように思われる。

ディスカッションが好きではないと回答した学生の理由やコメントについては、「いいえ」と答えた留学生2人と日本人学生2人の4人全員がその理由を説明していた。留学生も日本人学生も理由は共通しており、「強い主張がなかったり、何を言っているかわからなかったりするから」(留学生コメント)、「ディスカッションが得意じゃないから」(留学生コメント)、「人と面と向かって話すのが得意でないから」(日本人学生コメント)、「自分の主張を分かりやすく論理的に伝えたり、相手の主張にうまく反論することが苦手だから」(日本人学生コメント)といったディスカッション自体に対する苦手意識によるものだった。

ディスカッションが好きでも嫌いでもないと回答した学生の理由やコメントについても、「どちらとも言えない」と答えた留学生4人と日本人学生4人の8人全員がその理由を説明していた。ただ、その理由には、留学生と日本人学生の違いが見られた。留学生は、トピックや議論をする相手、また状況などによってディスカッションがどう進むかが変わるので、一概に好きだとも好きではないとも言えないといったコメントがほとんどだった。また、疲れているかどうかといった体調などによって異なるとのコメントもあった。これは、合同授業のディスカッションが行われたのが5限で、留学生はその日1限から4限まで通常の日本語授業が4コマあり、疲れていた学生もいたことと関係しているかもしれない。一方、日本人学生の理由は、ディスカッションや話すことが得意ではないことを理由に挙げた上で、好きではなくともディスカッションという活動の重要性を考え、「どちらとも言えない」という回答を選んだことが分かるコメントが多かった。これは、上記の「いいえ」と答えた学生と共通した理由である。

### 3.3 合同授業として行ったディスカッションの満足度について

ディスカッション経験や一般的なディスカッションに対する意識について問う質問の後には、今回行った合同授業について、まずはその満足度を尋ねる以下の質問を用意した。

#### 質問3

<留学生への質問>

今回の日本人学生とのディスカッションに満足しましたか(学習活動として楽しめましたか)。

<日本人学生への質問>

今回の留学生とのディスカッションに満足しましたか(学習活動として楽しめましたか)。

はい  いいえ  どちらとも言えない

[理由・コメント]

以下の結果から、留学生も日本人学生も「いいえ」を選んだ学生がいなかったことを考えると、全体的に満足度は高かったと言える。ただ、「どちらとも言えない」と回答したのは、留学生のほうが多かった。

	留学生 (12人)	日本人学生 (10人)
「はい」	8人 (67%)	9人 (90%)
「いいえ」	0人 (0%)	0人 (0%)
「どちらとも言えない」	4人 (33%)	1人 (10%)

留学生は「はい」と答えた8人のうち3人が、日本人学生は「はい」と答えた9人全員が、その理由やコメントを記入していた。留学生は、ディスカッションに満足した理由がそれぞれ異なり、「楽しかったが、時間が短かった。まだ勉強していない言葉を使わなければいけない時が度々あったので、少し難しかった」、「日本人学生はとても優しくかった」、「日本でLGBTがどう考えられているか興味深い意見を聞くことができた」といったコメントを述べていた。

留学生も日本人学生も、ディスカッションを行ったことには満足しているが、ディスカッションそのものに対する考え方や期待に違いがあり、それが「はい」と回答した学生の理由やコメントに表れていた。コメントからは、留学生より日本人学生のほうが満足しているのが分かるものが多かった。日本人学生は、9人のうち4人が「思っていたより」や「予想以上に」という表現をコメントに使っており、ディスカッション前は「留学生とうまく日本語で話せるのか」、「ディスカッションができるのか」といった疑問や不安があったのがうかがえ、その予想に反して、うまく話せたという結果から満足度が高かったように思われる。また、日本人学生のコメントには「日本のことを話せたし、オランダのことを聞くことができた」、「自分の聞きたいことが聞けて、自分の意見もある程度伝えられたと思う」といったコメントが多く、ディスカッションに求めていたことが「情報交換」や「意見交換」だったと推察できる。

それに対し、留学生はディスカッションのトピックについて深く議論することを求めていたようで、それが「どちらとも言えない」を選んだ4人の留学生の理由やコメントからうかがえた。その内容は「本当の意味でのディスカッションをすることはできなかった。日本人学生は、このトピックについて、はっきり意見を言うのは恥ずかしいと思っているという印象を受けた」、「興味深いトピックだったが、日本人学生がこのトピックについて特に知識があるというわけではなかったので、いい議論をするのが少し難しかった。議論というより質問のやり取りだった」といったものだった。

ディスカッションに対するこのような考え方や姿勢の違いは、前述の質問2の「一般的に授業活動としてディスカッションが好きですか」で学生が述べたコメントからも見受けられる。これは、今後、留学生と日本人学生の間でディスカッションを行う際には考えていかなければならない課題と言える。

### 3.4 今後のディスカッション授業の希望について

合同授業として行ったディスカッションの満足度を尋ねた後は、今後の希望を問うために、以下の質問を設けた。

#### 質問4

<留学生への質問>

今後も授業の活動として日本人学生とディスカッションをしたいですか。

<日本人学生への質問>

今後も授業の活動として留学生とディスカッションをしたいですか。

はい    いいえ    どちらとも言えない

[理由・コメント]

以下から分かるように、「いいえ」を選んだ留学生が1人いるものの、全体的には、日本人とディスカッションをしたいと思う留学生、留学生とディスカッションをしたいと思う日本人学生が多いという結果だった。

	留学生 (12 人)	日本人学生 (10 人)
「はい」	8 人 (67%)	8 人 (80%)
「いいえ」	1 人 (8%)	0 人 (0%)
「どちらとも言えない」	3 人 (25%)	2 人 (20%)

「いいえ」を選んだ1人の留学生は、理由やコメントを述べておらず、なぜ希望しないかは不明である。この留学生は、質問3の「ディスカッションに満足しましたか」の問いには「はい」と回答しており、今回のディスカッションに満足していないわけではない。ただ、後述の質問6や質問7のコメントを見ると、「普段あまり話さないトピックでディスカッションを行ったことについてはよかった」と肯定的に捉えているが、「日本人学生は皆同じ意見だった。お互いの意見に賛成し合っているだけで、真のディスカッションではなかった」とコメントしており、こういったことが今後の日本人学生とのディスカッション授業を希望しない理由だとも考えられる。

上記の結果を質問3の「ディスカッションに満足しましたか」の結果と照らし合わせてみると、留学生に関しては、質問3で「はい」と答えた8人の学生のうち5人が質問4でも「はい」と回答している。また、質問3で「どちらとも言えない」と回答した4人の学生のうち3人が質問4では「はい」と答えている。今回のディスカッションに満足した学生が今後もディスカッション授業を希望するのは当然なことだと言えるが、質問3で「どちらとも言えない」と回答し、満足度を中立的に示していた留学生が、質問4で回答が「はい」に変わり、今後もディスカッション授業を希望すると肯定的になったのは注目するべき点だと言える。

その要因は、「日本人とディスカッションを行えば行うほど、話したり議論したりすることができるようになるので、こういった活動をもっとするのはいいと思う」、「普段は他の留学生と一緒に授業しかないので、日本人学生と話すのはおもしろい。もちろん、国際機構の談話室で日本人学生と話すけれども、授業で日本人学生と話せるのは違う」といったコメントから分かるように、ディスカッションという活動自体が日本語を話す練習になると考え、日本語学習のためにディスカッションを行いたいと考えたからだと思われる。この留学生のコメントにもあるように、通常の日本語授業や普段の生活と違う設定で日本語を話す機会を留学生に提供するの、特に短期滞在の留学生にとっては貴重な機会となるので、積極的に取り入れていくことを検討すべきである。そして、質問3で「はい」と回答した学生の1人が質問4では「どちらでもいい」と答えているが、その理由はトピックによるというものだった。質問2のコメントと同様に、留学生にとってはトピックもディスカッションを行う上で重要な要素なのかもしれない。

日本人学生に関しては、質問3で「はい」と答えた9人の学生のうち7人が、質問4でも「はい」と回答している。しかし、残りの2人は質問3では「はい」と答え、ディスカッションに満足しているのにも関わらず、質問4では「どちらとも言えない」と回答している。その理由は、ディスカッション自体に対する苦手意識によるもので、「機会があればしたいけれど、自分から進んでというのはまだ積極的にできないと思う」、「ディスカッションをすることは就職活動の際の練習にもなるため、行うに越したことはないが、苦手なものでもあり、頻繁に行いたいものではない」といった理由を述べている。ディスカッションに対して苦手意識がある学生でも、その有用性や重要性を認識している様子がコメントから分かるものが多く、特に、日本人学生が苦手意識を克服できるようなディスカッション授業の設定を考えることが必要かもしれない。質問3と質問4の両方に「はい」と回答した日本人学生の中には、「今回のディスカッションで少し自信がついた。留学生とも物怖じせずに意見を交わせるようになりたい」といったコメントを述べた学生がいた。学習に対する動機づけから考えても、多くの学生がこのように思えるディスカッション授業になることが望ましい。

### 3.5 今回のディスカッションを通してのトピックに関する知識の深まり

今回の合同授業の満足度、そして今後のディスカッション授業に対する希望に加え、ディスカッションを通してのトピックに関する知識の深まりを問うために、以下の質問を設けた。

#### 質問5

今回のディスカッションを通して、トピックに関する知識が深まりましたか。

はい  いいえ  どちらとも言えない

[理由・コメント]

以下の結果から分かるように、この質問については、留学生と日本人学生の見解にかなりの差が見られた。

	留学生 (12人)	日本人学生 (10人)
「はい」	5人 (42%)	10人 (100%)
「いいえ」	5人 (42%)	0人 (0%)
「どちらとも言えない」	2人 (16%)	0人 (0%)

日本人学生は全員がトピックの知識が深まったと考えているのに対し、留学生はトピックの知識が深まったと感じた学生は半数以下である。オランダは世界で初めて同性婚が合法化され、世界で一番LGBTに寛容だと言われている国である。そのオランダからの留学生と、同性婚やLGBTについてディスカッションをすれば、日本人学生のほうが知識が深まったと感じるのは当然のことだと言えるかもしれない。また、質問2や質問3のコメントからもうかがえるように、留学生のほうがディスカッションに深い議論を求める傾向があることも関係しているかもしれない。

知識が深まったかどうかということについては、留学生と日本人学生の感じ方に乖離が見られるが、コメントを分析すると、留学生と日本人学生の間に共通した点もあった。それは、ビデオや資料といったものからではなく、ディスカッションを通して、実際のオランダ人の生の声、日本人の生の声を直接聞くことができたことに価値を見出している点である。質問5で「はい」と答え、知識が深まったと考える留学生は、「異なるセクシャリティに対する日本の状況を少し知ることができた。日本ではあまり身近なことではないだろうと思っていたが、それを改めて確認できた」、「日本人学生がLGBTについて少ししか知らないということが分かった」といったコメントを述べている。「どちらとも言えない」と回答した留学生のコメントにも「LGBTについて、日本人学生にどう考えているのか聞くのはおもしろかった。本やインターネットで情報を知ることはできるが、実際に日本人にどう考えているのか聞いてみることはいいと思う」と述べられていた。

日本人学生も同様に、「留学生から直にオランダのLGBTに関する現状や意見を聞くことができた」、「ビデオを通して理解を深めるだけでなく、現地の人のお話を実際に聞くことで、よりオランダの事情を知ることができた」といったコメントを述べている。また、「留学生の皆さんの共通の意見は、あのビデオの内容は自分達にとっては普通だということだった。やはり、テレビ番組なので、少し誇張されているのではないかと感じて見てしまっていたが、今回のディスカッションで事実を知ることができてよかった」といったコメントもあった。そして、日本人学生のコメントには、「同性愛の受け入れが進んだ社会や、その中での課題を知ったことで、日本の同性愛の受け入れに関する問題について考えられた」といったものもあり、他国の状況から自国の状況について考えることもできており、トピックに関する知識の深まりについては、日本人学生のほうが全体的に満足度の高さが見受けられた。

留学生のほうが知識のあるトピックについてのディスカッションではあったが、それをどう受け止

めるかは留学生によって異なり、個人差があることがコメントから観察できた。留学生の中には、文化によって考え方が影響されることをディスカッションで発見したことを評価する学生もおり、「こういった問題について他の人の意見を聞くのは、どんな場合でも、そのトピックの理解を深めるのに役立つ。考え方が文化に影響されることが特に新しい発見だった」といったコメントもあった。このような気づきが異文化間コミュニケーションや異文化理解において重要なことであり、多くの学生にこういった気づきが生まれるように、留学生と日本人学生とのディスカッションを促していくことを考えたい。

### 3.6 その他、学生のコメントから観察された点

質問1から5までは、ディスカッション経験の有無、ディスカッションに対する意識、ディスカッションの満足度、今後のディスカッション授業に対する希望、ディスカッションを通してのトピックに関する知識の深まりを、選択回答式と自由記述式を併用し答えてもらう形にしたが、質問6から質問8は自由記述式とし、以下の質問を設置し、学生に自由にコメントを書いてもらう形にした。

#### 質問6

今回のディスカッションで、自分にとってよかったことは何ですか。新しい発見があったこと、深く考えたことなど、詳しく書いてください。

#### 質問7

今回のディスカッションで、自分にとって難しかったことは何ですか。コミュニケーションで難しかったこと、トピックについて理解や説明が難しかったことなど、詳しく書いてください。

#### 質問8

今回のディスカッションについて、その他コメントなど自由に書いてください。

まず、「よかったこと」や「新たな発見」について、学生のコメントをまとめると、留学生は「日本人学生の意見を聞くのはおもしろかった」と述べている学生が全体の半数以上おり、また「普段、あまり話題に挙がらないことについて話ができてよかった」のような、トピックがよかったとコメントしている学生も複数名いた。オランダ人留学生にとって、彼ら自身のコメントに「同性婚はオランダでは普通のこと」とあるように、トピック自体は珍しいものではなかったかもしれないが、普段の生活の中で、日本人との会話になかなか出てこないことについて話ができたと評価している学生が多かった。

また、日本語を学習中の留学生ということもあり、「日本人学生と話すのは、いい日本語の練習になった」といったコメントを述べている学生が数名おり、日本語学習の観点から日本人学生とのディスカッション授業を評価する面も観察された。「新たな発見」については、「ゲイの人に今まで会ったことがないという日本人学生が多かった」とコメントしている学生が数名おり、これはオランダ人留学生にとっては意外な発見だったのかもしれない。

一方、日本人学生にとっての「よかったこと」や「新たな発見」には様々なコメントが述べられていた。質問5で日本人学生全員がディスカッションを通してトピックに関する知識が深まったと回答していることから分かるように、1コマ授業で1回行ったディスカッションではあったものの、その学びは大きかったようである。特に、ディスカッションを通して再認識したこととして、「日本はオランダに比べて同性愛の認知や受容が進んでいないことを改めて感じた」といったコメントを述べている学生が全体の半数以上いた。さらに、その再認識や気づきが、自分自身のLGBTに対する考え方について深く考えるきっかけとなった学生もいたようである。

これは、ある日本人学生のコメントの一部であるが、「私は自分の周りにLGBTの友人はいません。



あるいは、気づいていないだけかもしれません。もし私が友人にカミングアウトされたら、嫌な気持ちにはなりません、これまでと気持ちの面から何も変わらずに接する自信はあまりない、というのが正直な意見です。(中略)改めてオランダ人と日本人の間には、LGBTについての認識の差が開いていることを実感しました。今後の大西准教授の専門ゼミでの活動を通して、まずは自分のLGBTに対する考え方を良い方向に改めたいです」というものがあつた。政治家のLGBTに対する差別的な発言が報道されたり、日常生活でLGBTという言葉を目にする機会が多くなってきている昨今であるが、自分の考え方について再考するといった機会は、なかなかないと思われる。留学生とのディスカッションをきっかけに、このような前向きな思考になることは非常に意義があることだと言えるのではないだろうか。

その他、同性婚の話から話題が発展し、日本人学生にとっては「新たな発見」だったこととして、性別の記入について挙げている学生が数名いた。留学生から「日本でホテルの予約や、チケットをとる際に、性別の記入を求められることは違和感がある」、「エントリーシートの中に性別記入欄がない」と聞いたといったコメントがあり、「自分が日本にいて当たり前になっていて気づかないようなこと」に理解が深まったのがよかったと感じた学生もいたようである。日本人にとっては、履歴書に性別を書くことは普通のことかもしれないが、オランダをはじめ欧州では、性別で差別をしないこと、平等であることが前提となる。こういった気づきは、異文化への理解、そして自国の文化への再認識の第一歩となるのではないだろうか。

次に「難しかったこと」についてだが、留学生のコメントを見ると、ほぼ全員が語彙力の問題を挙げていた。特に、使用語彙の問題点についてコメントしている学生が多く、自分が言いたいことを伝えるための適切な語や表現が分からず困ったといったコメントが非常に多かった。反対に、理解語彙については、知らない語があつても、日本人学生が説明してくれたので大丈夫だったと述べている学生が多かつた。留学生の日本語熟達度を考慮すると、今回のディスカッションのトピックにおいて、適切な語や表現が分からないという問題は十分理解できるが、それがディスカッションを進める上で、コミュニケーション・ストラテジーを駆使することで解決できるレベルの問題なのか、または事前準備としてさらなる語彙学習が必要なのか、今後、ディスカッション授業を行う際に、調査すべき課題だと言える。

日本人学生が「難しかったこと」として挙げていたことも、留学生と同様で、語彙や表現の問題をほぼ全員の学生がコメントに述べていた。日本人学生の場合は、「自分が日常的に使っている言葉が理解されず、言い換える時にどのような言葉で言い換えたらいいのか分からず、会話がスムーズに行かず留学生を困らせてしまった」といったコメントに代表されるように、日本語でどう説明すれば分かってもらえるか、語や表現の選択に苦労したというものが多かつた。これに関しても、上記で述べたように、実際の日本人学生と留学生とのやり取りを分析するなどし、調査すべき課題だと言える。

質問8のコメントとして述べられていたことで、特筆すべき点としては、日本人学生の自身のコミュニケーションに対する気づきが挙げられる。「これを機にもっとゼミの人とコミュニケーションをとっていけるよう頑張ります」、「何を話そうか考えているうちに黙り込んでしまった場面もあつたので、克服できるように努めようと思います」、「今回の留学生とのディスカッションは、トピックを理解したり、私の聞く・話す能力を知る上でとても良い機会でした」といったコメントがあり、今回のディスカッションが自分のコミュニケーションの仕方について考えるいい機会となつたことがうかがえた。この経験を次のステップにつなげる工夫を考えていく必要があるだろう。

#### 4 まとめ

本稿では、留学生と日本人学生の合同授業におけるディスカッションについて、学生に行ったアンケート結果をもとに、ディスカッションからの学びや気づき、問題点や課題をまとめた。留学生と日

本人学生の合同授業は、他大学の試みにおいても述べられているように、そこには通常の授業では得られない学びがあり、それは両者にとって異文化学習である。その中には新たな世界との出会いと同時に自己の文化への見つめ直しがあり、そしてそれが自身の価値観が再構築されるプロセス（徳井2007）へとつながる。本稿での試みは、1回のディスカッション授業からの考察にすぎないが、今回のアンケート結果をもとに、ディスカッションを通して留学生と日本人学生の間で有意義な合同授業ができるよう、さらなる実践・研究を進めて行きたい。

#### 注

- 1) 本稿に出てくる留学生のコメントは、英語で書かれていたものは和訳し、日本語で書かれていたものは基本的にそのまま掲載しているが、間違いに応じて適宜修正をしたものもある。

#### 参考文献

- (1) 奥山和子（2016）「『異文化理解』授業における学びについての一考察：アクティブラーニングの視点から」『神戸大学留学生センター紀要』第22号，pp.107-126.
- (2) 北出慶子（2010）「留学生と日本人学生の異文化間コミュニケーション能力育成を目指した協働学習授業の提案：異文化間コミュニケーション能力理論と実践から」『言語文化教育研究』第9号，pp.65-90.
- (3) 徳井厚子（2007）『日本語教師の「衣」再考－多文化共生への課題－』くろしお出版.
- (4) 永井涼子・南浦涼介（2014）「大学授業において留学生と日本人学生は共に何を学べるか：留学生教育と社会科教員養成をつなぐ試み」『大学教育』第11号，pp.49-66.
- (5) 安井朱美（2008）「留学生と日本人学生との合同授業の試み－コメントから見えてくるもの－」『南山大学国際教育センター紀要』第9号，pp.114-128.